

横浜市立市民病院で5月から 「最新の脳動脈瘤治療」を開始！ ～「フローダイバーター留置術」、県内で2施設目～

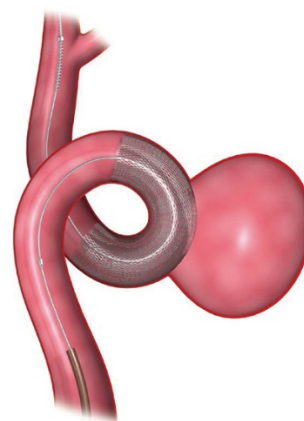
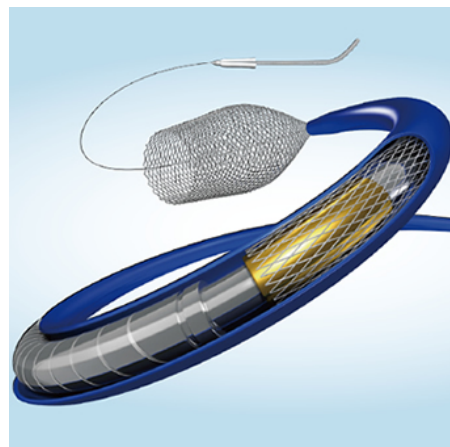
横浜市立市民病院では5月1日（火）から、大型の脳動脈瘤の最新治療である「フローダイバーター留置術」による治療を開始します。脳動脈瘤は破裂すると、くも膜下出血など生命にかかわる危険性があり特に大型のものはこれまでは治療が困難でしたが、新しい治療法により、高い治療効果が期待できます。この治療が可能な病院は、当病院を含め神奈川県内で2施設のみです。

◇ 難易度の高い治療法、全国44病院のみで実施可能

横浜市立市民病院では今年1月に脳血管内治療科を新設、増尾修（ますお・おさむ）医師（平成5年卒、日本脳神経血管内治療学会指導医）、鐵尾佳章（てつお・よしあき）医師（専門医）の2名が赴任し、治療に当たっています。増尾医師は前任地で、「フローダイバーター」の治療医として認定され、最新の脳動脈瘤治療も行っていました。

この最新治療法は平成27（2015）年10月に国内で認可されましたが、「フローダイバーター」（金属製の非常に網目の細かい筒）を使った治療は難度が高いため、脳動脈瘤の血管内治療の十分な実績と経験を有する脳血管内治療医が行う必要があります、日本脳神経外科学会、日本脳卒中学会、日本脳血管内治療学会の3学会が認定した医師に限られ、現在、この治療ができるのは全国で44病院の44医師のみです。

治療医師は常勤の1施設での治療に限られているため、増尾医師は5月から横浜市立市民病院でこの治療を行います。神奈川県内でこの治療が可能な施設は、昭和大学藤が丘病院、横浜市立市民病院の2病院2医師のみです。



フローダイバーター（日本メドトロニック社提供）

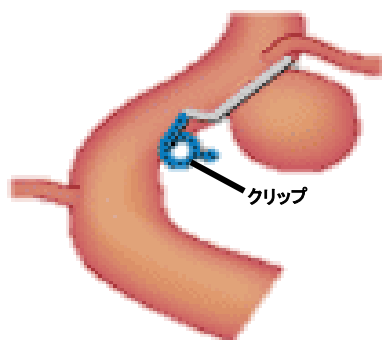
（裏面あり）

◇ これまでは 15 ミリを超える大型の脳動脈瘤は治療困難

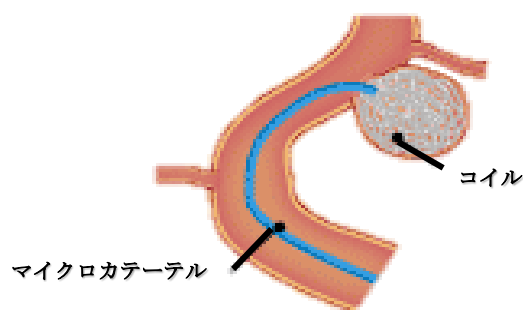
脳動脈瘤は、脳血管にできた”血管のこぶ“で、先天的要素に加えて、高血圧などの後天的要素が加わって形成されます。破裂すると、くも膜下出血という重篤な病気を引き起こします。くも膜下出血を起こすと、治療を行っても亡くなったり、重い後遺症を残すことが多く、社会復帰できる人は3人に1人とされています。

脳動脈瘤の治療には、頭蓋骨を開頭して脳動脈瘤の根元をクリップで挟み、こぶの中に血液が流れ込まないようにする「クリッピング術」と、「カテーテル」と呼ばれる細い管を太ももの付け根から脳の血管まで通して、金属製の細いコイルをこぶの中に詰める「コイル塞栓術」があります。現在は、この2つの治療を、動脈瘤の大きさ、場所、形状、患者の状態に応じて、使い分けて行っています。

しかし、大きさが15ミリを超える大きな動脈瘤は、いずれの方法でも、手術を行うと患者の身体的負担が高くなることに加え、再発率も高く、これまでは治療が困難でした。



開頭ネッククリッピング術



動脈瘤コイル塞栓術

◇ 新しい治療法は所要2、3時間、身体への負担が軽減

新しい治療法は、このような治療困難な脳動脈瘤を対象としたものです。具体的には、太ももの付け根から脳の血管にカテーテルを通して、動脈瘤の根元部の血管に直径3～5ミリの「フローダイバーター」という金属製の非常に網目の細かい筒を、動脈瘤の入り口を覆うように留置します。これによって、こぶの中への血液の流入が低下し、動脈瘤を血栓化させて破裂を防ぎ、動脈瘤自体を退縮させます。

動脈瘤が大きくなると、破裂しないまでも周囲の神経を圧迫して、視力障害などを引き起こしますが、新しい治療法では、動脈瘤が退縮することにより、圧迫を軽減させ、症状を改善させることも期待できます。また治療時間は全身麻酔下で2～3時間で可能で、身体への負担も軽減されます。

お問合せ先

医療局病院経営本部 市民病院総務課長 岸田 純也 Tel 045-331-7721